

地方史研究の現状

⑥

青森県



長谷川成一

小口雅史

龍本壽一

小岩信竹

りんご(県花)

現状と課題

戦後、数少ない「県史の刊行されていない県」の一つが青森県である。他府県が県史をはじめとする、自治体史の編纂事業にとまなう新史料の発掘と研究蓄積の増加によって、地方史研究の水準を飛躍的に向上させている中で、本県のそれは大きなハンディをおっているといってもよからう。しかしこのような状況の中で、以下に論述するように本県における地方史研究は、ここ十数年間で着実に進展し、多くの成果を積み重ねてきた。

この「地方史研究の現状」シリーズの企画は、周知のごとく約四半世紀前に本誌上ではじめて実施されており、その際の青森県の執筆者であった盛田稔氏は、一九六四年の『日本歴史』一九六号において、巻末に「青森県の地方史研

究も新時代に突入した」と記した。ややもすれば停滞気味の観があった研究状況を打破しようとする意気込みがみなぎっていた当時から長い年月が経過したが、その当時の人々の意気込みを立脚点として、現在の新たな状況が存在することは間違いないと思われる。

さて研究成果とその問題点については、各章をご覧いただくとして、ここ十数年において研究の飛躍的な進展が見られた理由を、筆者なりにまとめると次のようになろう。

第一は、津軽や南部、青森県等の地域的な枠組みを取り外した、広域的な広がりを持つ研究対象をフィールドとし、学界において全国的に討議の対象となるような、最新の問題関心を持つ研究者によって、本県の歴史研究が進められてきたことである。一例をあげると、「北からの日本史」地域・民族・国家」を統一テーマとする北海道・東北史研

研究会に参加する研究者は、北海道とともに本県に在住もしくは本県を研究対象にした人々が多く、彼らは各時代の国家史を解明しようと研鑽を積んできた。したがって本県を包含した北日本地域の研究が、新たな日本国家史あるいは新たな地域史像の創造につながるという問題意識に連動し、良い意味での研究の刺激となったことは否定できない。ここに本県地域史研究進展の鍵があるといえよう。ただし問題がないわけではない。前近代の研究水準が向上したにも関わらず、近・現代史研究がそれに比較して立ち遅れている観は否めず、新たな史料の刊行が一部実施されつつあることを鑑みても、本県における研究の跛行状態の是正は是非必要であろう。今後の課題でもある。

第二は、県史が刊行されていないにも拘わらず、出版社の企画する全国的な辞典類や各県通史の編纂に多くの本県の研究者が参画することによって、新史料の探訪がなされるところにも研究者同士でそれらが共有され、その意味からも新たな問題関心が喚起されてレベルアップにつながった。さらにこれらの事業は、若手の研究者の育成にも資するところが大きであった。しかしここでも近・現代史研究者の層が薄く、今後近・現代史研究の成果を蓄積するには、これらの研究の担い手を育成することが急務であろう。

第三は、盛田稔氏が前回の「地方史研究の現状」で県内

五つの研究会を掲げたが、その中には研究活動が往時の盛行を見せないものも存在するようである。しかし一九八一年に創設した八戸歴史研究会のように、機関誌「八戸地域史」を刊行し旺盛な活動を見せている研究会もあることは、まことに喜ばしい。また弘前大学国史研究会は、従来、機関誌「国史研究（弘前大学）」に近世史の論文を多く掲載してきたが、近年は投稿者が全国的な広がりを持ち、かつ古代史、中世史はもとより、近世史、近代史も最新の研究成果を盛り込んだ若手の論文がのるようになった。

以上三点にわたって、本県における研究の現状と課題を総論的に申し述べた。古代・中世史、近世史、近代史の各研究状況については、以下の各章をご覧いただきたい。なお各原稿については、筆者が細かい点で統一をはかったが、体裁や論述の在り方などは各執筆者の意向を尊重して、そのままとした。右の点をご了承いただきたい。

（はせがわ・せいいち 弘前大学人文学部教授）